

ありける  
 編者曰ふ當時其事世に名高かりしかば大阪豊竹座の淨瑠璃作者紀海音が狂言に綴て翌寶永八卯年四月八日が初日にて油屋お染袂の白綾と名題を下し本朝五翠殿の切狂言に出せしに大評判にて六月二十日まで打續けり是れお染の事を狂言に任組める始めなり此後明和四亥年十二月再び同座にて菅尊助の作にて翻案し染模稜妹背門松と題して興行せしに是れまた大當りなりしと又た安永九子年九月朔日より稻荷篤藏座に於てお染久松新板歌祭文作者近松半二と名づけ脚色を改ためて興行せしに是れも五十日餘の大入なりしと云ふ是等の狂言は何れも久松はお染の情人なりとせしゆへ此後出来る新狂言も皆な其虚誕に據り益々妄を傳へたるゆへ遂に實事は埋滅して世これを知るもの無に至れるなり

●梅野由兵衛の實傳

梅野由兵衛は夫婦ともに博奕盜賊を業とし後に人を殺して刑せられし梅澁吉兵衛といふ者の事なり然るに演戲にては斯る凶惡不良の徒を翻して俠客となしたるは所謂那を飾りて正となすものにて甚だしき心得違へといふべし今其事實の概略を掲んに梅澁吉兵衛は大阪聚樂町に住みて頗る勇盜社騙の術に長じ始め

て胡椒頭巾といふを發明せしほどの惡黨なり或人云く胡椒頭巾といふは紙袋に胡椒を盛てひそかに往來人の頭に被らせ其人の胡椒にむせび懊惱する隙間を窺ひ腰の巾着懐中の財布など自在に奪取の工夫にして其頃専ら惡徒仲間に行はれしものなりと常に騙術の方便にせんとて大阪中にあらるる兩替屋の手代小者の親兄弟在所の事とも普く探り得て能く覺へ居り又た丁銀板を兩替屋へ持ち往き子銀に替へ今一度見せよとて丁銀を手に取しかと思へば忽ち摺換ること實に不思議にて兩替屋ごとに兩三度づ、此の騙術に遭はざるはなき程なれば人その異名を板替の吉兵衛と呼びて恐れけり或とき賭博の事に坐し久しく牢舎に繋かれしが元祿二年四月十九日の大赦にて放免となり獄を出ると間もなく其年の五月十九日また一の凶事を行ひたり其はいかにといふに其日天王寺屋久左衛門の小者長吉といへるが金百兩を持って引換へに行くを何として知りたりけん途中にて長吉を呼かけ只今其方の父御が在所より來られ早く面會致したきとのにて我等に頼まれたれば今迎へに行く所なるに折能く、にて出逢たりいざ我と共に参るべしと云ふに長吉は大用を抱へたるうへ見知らぬ人のとなれば合點行ねば否な我は大切の用事あれば今は参るまじ其旨傳へて拾へさて貴殿は何人にておはすやと問へば吉兵衛は振らぬ顔にて我は其方の在所の者にてかねぐ親御とは



至て入魂にするものなり其方は當地に來りて住むこと久しければ我を見知ぬは道理なれども我は能く其方の幼稚きころよりの顔を見覺へ居れりて長吉の身元より親の履歴まですらく物語りて重ねて是非とも參るべし左なくば定めて親御が恨みなんと言ければ長吉は遂に救き負され然らば立ながら暫時遂て行かんとして吉兵衛に伴はれてその家に至りける此に吉兵衛の妻は小梅とよびて吉兵衛よりは十五六の年曆なれども博奕に巧なるゆへ妻とせしにて常に夫を助て悪事を働らき人を害し財を掠むるに長じたるものなればその日も吉兵衛と示合せ長吉の至るを見るより無理に勸めて奥へ通し不意に後より蒲團を打被らせたればアノ人殺しと叫ばんとするところを吉兵衛馳寄り刀を抜きて刺殺せり折ふし隣家の者どもは此怪しき物音を聞つけ驚きながら壁の破より窺ひ見れば早刀の血を洗ひるるところなれば餘りの事に肝を潰して是はこのまゝ見逃しになりがたしとて合借家の者ども出會ひて直に家主與次右衛門に斯と告たるにいかなる心にも與次右衛門は是は以ての外なる事をいふ人々かなあれば珍らしからぬ夫婦喧嘩なりかならむとも處相な沙汰ばしせらるゝなど制したれば人々は健な事は見認たれども斯く曲庇はるゝ上からは事を好むにもあらむとて遂にそのまゝ引取ける其後吉兵衛夫婦は奪ひし金もて新地堂島北町にて茶屋を開かん

て家を借用意に取掛りしかりからこゝに小梅の第三右衛門といへる者ありしが三右衛門はいかなるゆへにや其妻を離別しけるにかねて其女は吉兵衛夫婦が悪事を聞知り居るゆへいかで離別せられし腹筋に兄弟のものに愛目を見せばやとて長吉の主人なる天王寺屋に遺文して梅津吉兵衛夫婦が長吉を殺し死骸をば其第三右衛門が打棄し由を認めければ主人久左衛門は披き觀てさては盜賊の手掛知れたりとて直に町奉行所へ訴たへ出ければ即時に與力同心數多を新地に遣はして召捕んとせられしにその夜吉兵衛は新町の遊廓へ赴き居たれば直に廓門を閉ぢ殿しく遊女屋を搜索して遂に取捕へ縛して獄屋へ送られしが此夜は六月十九日のことなり扱て翌日小梅三右衛門與次右衛門及び合借屋の者ども殘らむ召出され訊問ありしに合借屋の者は口を揃へて其日云々のことにて家主與次右衛門が止めたりし由を陳ければ構なしとてそのまゝ放還されしが小梅三右衛門與次右衛門の三人は今は是れまでなりと歸らめけん殘らむ有りのままに白狀しければ吉兵衛をも突合せられ偕て死骸は尋ねられしに小初瀬のはどりの古井に投棄たりといふにつき早速其處を搜索させられしに果して長吉の死骸はまだ色も變せきしてありたりと又た金の遺ひ方を吟味せられしに八十兩ばかりは知れたれども餘は知れざりしとを斯ていよく罪科も極りければ吉兵衛は磔刑に處



せられ小梅三右衛門與次右衛門の三人は大阪追放となりしに與次右衛門は大膽にも古宇都に隠れ居たるを世人も其姦惡を指彈し居れば遂に断たへ出たる者ありて再び召捕れ公命を背くの科を以て首を刎られ又た小梅は其後子殺をなしたれば是れ亦た磔刑に處せられたりとぞ

編者曰ふ此事を始めて狂言に脚色めるは西染野中隠井戸にて梅澁の澁の字を略き吉兵衛の吉の字に「ヨシ」といふ訓あれば由の字に換て梅の由兵衛と名づけたるなり又た長吉の死骸を古井に投じ且つ殺すときに蒲團を被せる事などは實事をそのまゝ、用ひさせ長吉を小梅の弟となし故主の爲に由兵衛がこれを殺せしとに取仕込大阪にて興行せしに大當りなりし由にて今に至るまで有名な狂言となりされとも惡を飾りて善とし邪を庇して正とするの罪は決して遁るべからき又た江戸にては元文元年遊君鑑曾我五幕目の放れに澤村惣十郎が梅の由兵衛をつとめ例の鷲と鳥の衣裳紫の鍔頭巾へ鏡を下して男達に取仕組興行せしに大當にて今も此形は残り居とも凶惡無二の吉兵衛を以て純然たる俠客となしたるは是れ亦た甚だ聞れなきとなり

●おはん長右衛門の實傳

世皆なおはん長右衛門は情死せしもの、如く思へとも實は情死にあらず横死し

たるなりしかるに此の横死の事に付ては兩説あり其一説は世の言ひもて傳ふるごとくおはんは京都の町人の娘にて當時年十四五の少女なり(家名を信濃屋といふ)又た長右衛門も其同町の商人にて(家名を帶屋といふ)もの即ち是れなりおはんは私通せしに既に懷妊におよびしかばせんかたなくて相携へて走り桂川の邊におはんが乳母ありければ此夜は此乳母が家をたのみて止宿し翌日まだきに立出てその指す方へ赴ひかんとすおはんが親は京都にてしかるべき商買なりければおはんは路用のために親の有金若干を盗み出して懐にしたるを乳母なりし女はやく猜して金あらば明日まで吾に預けたまへといふ此をり長右衛門は所用をはたさんために外に出て居合さよりしかばおはんは言ふがまゝに懐なる金を乳母に預け、り斯て初夜過るころ長右衛門も乳母が家に歸り來て俱に寝にけりさるほどに乳母は金にまよひ悪心起りて竊かにその子某と示し合つ、小夜更くるまゝに兩人が熟睡せしかり臥房に忍び入りて縊り殺しおはん長右衛門が衣の襖を結び合せて桂川に棄にけり一兩日を経て兩人の死骸浮み出て岸に着しかばおはんが親長右衛門の妻はさらなり人々皆な情死なりと思ひて官府に断たへ檢屍を請ひて其死骸を葬りぬ此の長右衛門は年輪五十に近きものなりければふさはしからぬ情死なりとて世評噪がしかりき斯てその翌年おはんが一周忌に當り



門衛右長んはお

しころおはんが兩親追薦の物事を修せんために桂川なる乳母をも招きよせて庖厨のわざを手傳はせしに其速夜に牡丹餅を拵へんとて乳母の煮たる赤小豆を摺せしに最も熱しとて諸府を脱たるに縹袴の色に覺へあるおはんが縹袴なりければ主人夫婦は乳母をうたがひて竊かに町奉行所へ訴へしにより乳母と其伴は召捕られて白狀前條のとほりに紛れなかりしかば乳母も其子も嚴刑に行はれしといふ是は安永年中のとなりと此の説は古く京都人の語傳へたる所にしてや、實傳に近かきと思ひしに又た此に一説ありておはんは實名おはん京の町人の娘長右衛門は實名長左衛門大阪の商人にて常に京へ往きて賣買しぬるものなればおはんが親と疎からせ其年齢は世に言傳ふることくなれどもおかんと私通せしともなく當時おはんは大阪なる親族の手引にてかの地のしかるべき家へ奉公に遣すべき約束あり日々に大阪より迎ひの人を遣すを待しに久しくなるまで便りなかりき折から長左衛門は京へ來りて商ひ仕はて、大阪へ歸ると聞へしかばおはんが親は長左衛門に云々と娘のうへを告いかでおかんと伴ひて大阪なる某に渡したまひねと頼みしかば長左衛門は止むことを得て頼みに任せその夜はおかんが親の家に一泊し翌日未明におかんと伴ひて立出けるに誤りて時を取り違へ明るにはとはあるべからせと思ひしに尙は曉七ツにはならざりけりおかんが親の

門衛右長んはお

家より大阪へ趣くには桂川を渡るが順路なれば既に桂川まで來にけるに尙は夜深ければ渡す船あらせせんかたなさに兩人河邊にイみて天の明るを待ほど此邊の兎漢博奕の歸るさにこれを見て疑ひ訝かり立ちよりて由を問へば長左衛門云々なりと答ふそのおん兎人思ふやうこの男今言ふよりは虚言にて實は此の少女子を誘ひ出して俱に走るにぞあらんせらんしからば必ら懐中に路用の金あるべしせんすべありと計較しを氣色にもあらはさき長左衛門に打向ひてそは笑止なる事なりかし今がた八ツの鐘聞へたれば明るにはまだ遙かなるにいつまでか斯てあらん我れ渡してまゐらせんいざ此方へと先に立ちて繋ぎし舟に打乗て竿を引抜きて岸によすればおはんはさらなり長左衛門も悦を述べて諸どもにやがて舟に乗り斯て舟の悪者は舟を中流に漕出せしが忽ち竿取直して長左衛門を毆殺しましたおはんをも打殺して路用をさぐるに長左衛門が懐中に金二十兩餘あるを奪ひとりおはんの衣裳の下着も皆うばひて情死と思はせんために兩人の衣の襪と襪とを結びおはせて桂川の水中へ投棄て舟を元の處へ漕ぎかへし繋ぎとめて逃去りけりその長左衛門おはんの死體浮み出でければおはんの親鸞さうたがひ検視のふり長左衛門は金二三十兩懐中せしと聞へしに其金子無こそ不審なれと申立しかば是は盜賊の所爲なるべしとて町奉行所より遊里及び兩替



屋どもへ籍に下知して駈たへ申せど觸告けり件の盜賊は奪ひ取りたる金を資本として商ひをせしに素より不義の資金なれば繁昌すべくもあらざ刺へ長病に打臥したればさ、やかなる借家に居れりしかれども其金猶は幾兩か残ければそを一兩づ、錢に換へて一年ばかり支へしが果は僅かに小判一兩になりしを反故は元來長左衛門が金を包みし紙なれば長左衛門の名を記してありしを賊は無筆なれば思ひよしを知らざるなり其かり而替屋には件の金の包紙を心ともなく打見るに一兩年前町奉行所より觸れ示されし盜賊穿鑿の手が、りと思ひ合するよしあれば乃ち町奉行所へ訴へて包紙を差出しければ賊は立所に召捕られて訊問におよびしに白狀前條の趣きなれば乃ち死刑に行なはれしとなん此説は其頃京都町奉行なりける松前筑前守江戸へ下りし祝ひに鐵醫山崎宗運その邸へ至りて對話の次在勅中奇談は候はせやと問ひしに否させる奇談はなしたる今世に言ひもて傳ふる長右衛門おはんといふ男女の情死の事はいたく謬り傳へたるなり其故は箇様々々と前條の趣きを説て此事は予が勅役中自から吟味したる事なればかばかりの實説はあらざと語りしとぞ因て按ふに前の一説も似たる事は似たれども京の人の猶は謬り傳へたるにて後の説の確實なるに如き又た右の筑前守が勅役は寶曆六年より同十一年までなれば此の年間にありし事なるべし

編者曰ふ此事を淨瑠璃に作りしは大阪に於て安永五申年十月七月初日にておはん長右衛門桂川連理柵と題して興行せしが始めなりそのころ大評判にて四十餘日打續きて大入りが落さざりしといふ是の作者は近松東南なり又た江戸にて歌舞伎狂言に仕組みしは天明元年四月二十日より市村座に於ておはん長右衛門道行瀬川仇浪と名題を下し櫻田治助が作りなしたり當時長右衛門に松本幸四郎(老後に男女川錦十郎と改む)おはんは瀬川菊之丞三代目路考老后は仙女と改名すにて無比の大入を得てそのかり淨瑠璃道行は富本豊前太夫の出語にて其曲後にいたるまで豊后節にのこれり是れらの淨瑠璃狂言はいづれもおはん長左衛門を情死したりと作りしゆへ自から世人の耳目もこれに慣て終にはその實傳を知るものなきにいたれるなり世傳ふる所の情死など、いふものは此の類甚だ多し

園六三郎の實傳

お園六三郎の事は古くより演劇にてもものし釋史等にも作り世傳ふる所種々なれども其實傳はたい兩人痴情にせまりて情死せるまでにて左までの事跡もなし今攝摘みて記さんに寛延年中大阪南新家の娼家福島屋清兵衛の抱女郎にお園といふものあり幼き時より同家へ賣られ十四五歳のころより客を迎へしに容貌は



左までならざれども妙齡のとなれば馴染の客も多く可なりに繁昌せしかば地主  
 清兵衛も金の蘆を得たりとて悦びおたりしかるに或る夜名ざしにてお園を聘し  
 し客あり誰人にやと思ひ至り見るに漸う十七歳ばかりなる職人体の客なりいか  
 なる因縁にやお園は一目見るより頼りに慕はしくなり此人ならばなどか生命も  
 惜かるべきとまで思ひ染たり此方は未だ少年のとなれば深き情もあらざりしに  
 其夜お園より心の丈を掻口説かれしかばこれにはたされそれよりは夜毎にお園  
 の許へ通ひつめたり此者は大寶寺町大工某の丁稚あがり六三郎といふ者なれば  
 金銀に富べき道理もなく始の程は親方に頼みて金を乞ひ同職の者などに借もし  
 て通ひたれども是れとても長く續くべきにもあらねば果はお園がみづから揚代  
 金等を償へりかくてあると四五月に及びしにお園は次第に借財満日々に債主の  
 督促さびしければあるにもあられせ或日六三郎の來たりしかり斯く切迫の身と  
 なるうへは所詮斯世にて二人が夫婦となるとかたければ一緒に死て後世の契り  
 をたのまんどいふに六三郎も異議なく承知して其夜ひそかに同家を抜出せりか  
 くて兩人手を携さへて西横堀にいたり堀中へ身を投げて共に死したり時に寛延  
 二年三月十八日の夜のとにてお園は二十二歳六三郎は十八歳なりしといふ此頃  
 世人は十八歳の丁稚あがり情死するとは珍らしきとなりとて喋々として語あ

へしゆへ演劇にても此事を脚色み三世相といふ淨瑠璃も出来また江戸にても種  
 々に脚色むととなりしなり

●安珍清姫の實傳

今は昔し陸奥國白川驛を距こと一里餘なる茅根村の山手に住める安鎮といへる  
 者あり此者羽黒山の修験者にて年々法用のため紀伊の三熊野へ往來するにより  
 同國室郡眞砂の里の庄司某といふ者の家を定宿とせしが此家に一人の娘ありて  
 名を清姫とよべり生れ得て容貌甚だ醜く見る人ごとにあざみ笑ふはとなりしが  
 和歌を能咏み又た物書手振も拙からむ両親は深く寵して荒き風になへ當る深閑  
 の中に育ひしに安鎮は年々宿を求め自然打解るに隨ひ或る時戯れに貫燵をば我  
 が妻に迎へんと思ふがいかにさすれば陸奥へ還歸りて面白き物を見せ申さんな  
 と、只だかりそめに言捨しを清姫は眞實とおもひ深く戀ひ染めて忘れやらせ安  
 鎮こそは我夫ぞと心に定めける斯くてその後安鎮が例のごとく此家へ宿りし夜  
 清姫は人定を待ちてひそかに安鎮の寐床へ忍びゆきて妾も早や今年は十三歳に  
 なりぬいつまで斯くて置たまふ疾陸奥へ還歸りたまはせやと切に掻口説きけれ  
 ば安鎮は驚き且悔て由なき事を言ひてけりと思へども今更前言は戯れのみとも  
 言ひかねて其夜は程よくあしらひ頓て三熊野へ詣で果なば具して歸らんと論し



安 珍 清 姫

てその閨房へ歸し翌朝風に立出しに清姫は門邊まで見送りつ、一首の和歌を藤の折枝に結びつけて渡せりその和歌は

先の世のちきりのほとを三熊野の神のしるへもなとかなからん

安鎮はかくまで我を思ひそめしかと心中痛く恐れたれとも返歌せぬもいかいと

思ひて

三熊野の神のしるへと聞くからにははゆくすへの願もしきかな

と詠じて別れけり斯て清姫は安鎮が欺ばかりしとは夢にだも知らざれば今日は三熊野より下向やしたまはん明日は宿をもとめたまふやらんと朝に夕べに指折數へつ、待ともく音信なし餘りの事に堪兼て驛路に立出て見廻るうち先達とかいふ者めきたる老法師に行逢たり是れを幸ひなるとて安鎮の模様をかたりて云々の修験者を知りたまはせやと問へば老法師うなづきていかにもそれと思しき者を見當りしがその者は後れて七八丁跡より來たるはづなりと答へて足疾に行過ぎぬ又た後より來る一人に問にそは十二三丁跡よりと言ふやいなや逃るが如くに去りぬ清姫は行けどもく安鎮に逢せこ、に至りて其言葉の合ぬに初めて疑心を發しやうやく歎られしかと思ひ當りしかばおのれ浮薄男子このうへは何處までも追行て怨みのほとを言はで置べきかと血走る眼に彼方を睨み髪逆立

安 珍 清 姫

て走り行くその有様は平生の醜き面にいと尙恐ろしなると言ばかりなし行逢人は皆おどろきて是は所謂鬼女なんといふものにやと取はやすを耳にも觸せ飛ぶがごとくに同所天田川迄行着ぬ乾度向ふの岸を見れば此時安鎮は渡し舟より岸へ上りしところなれば焦て舟を呼ども渡守はすでに安鎮の頼みを受しかさらし舟を漕寄ねばいよく怒りて川中へさんぶと身をなげ浮きつ沈みつ前岸を目かけて泳ぎわたる間に安鎮は急ぎ其傍なる矢田の莊の道成寺へと逃入て住僧に詞忙しく仔細を告げ隠まひ貫ふ隙もあらせ清姫は跡を慕ふて追來り此寺へ云々の修験者が逃入りたるに相違なし疾達せてたまはれと言追りて住僧が陳じても肯かざれば今は持餘して梵鐘の下しありしを幸ひにこれを指しそれはとまで和女が見極めなばよんどころなし實は此梵鐘の中に彼の修験者は隠れありと聞より清姫は嬉し氣に走りよりしが貫目重き大鐘なれば押と揺れど聊か動く色なければ最口惜くや思ひけんそのま、引返して天田川へ駈至り遂に深みへ投身して死したりけり跡にて安鎮は初めて喘息を吐き虎の口を遁れし心地して陸奥へ急ぎ立歸り茅根村の家に在りしがその後幾程もなく煩らひつき遂に果敢なくなりしとぞ今も岩代國白川在茅根村の山手に當りて一叢の竹林あり土人はこれを安珍の屋敷跡といふ又た同所より七町ほど距りし處に根太村といふあり其山手



に最古き石塚ありて文字も定かならねど是れ土人が安珍のために建立せしものなりと(石塚の丈三尺二寸幅七寸二分)又其側らに藤棚あり其藤も亦た著しき古木にて是れ彼の清姫が和歌に添へて安珍へ贈りしところの藤の枝を持歸りて捨るが如くにさしおきしが遂に繁茂して斯のどくなりし由にてその藤の塚をまどひ居れば土人は是を清姫がからみ藤と呼り然れども安珍を葬りし所は此塚にあらき同村より尙二十丁餘もある山奥にて百年ばかり前は石硯有しが今は墓石の存するのみなりと云ふ

秘藏文庫終

全 明治二十六年十月十三日印刷  
年十月十九日發行

定價金參拾錢

發行兼編輯人 大阪市東區平野町四丁目番外五番邸 矢尾彌一郎

印刷者 大阪市東區平野町四丁目九十一番屋敷 喜田甚太郎

發行所 大阪市東區借后町堺筋角 盛業館

發行所 大阪市東區平野町四丁目 弘文堂

賣捌所 大阪市東區瓦町心齋橋角 中村峰雄

全 大阪市南區心齋橋北詰 競爭屋

全 大阪市東區安土町心齋橋筋 積善館

全 大阪市東區北久太郎町四丁目 岡本仙助







●國利民福の一大要報 此廣告を一見せし諸君は親戚朋友其他一般 帝國美術協會長 安藤鐵齋君序文 職工學校卒業生 吉田南翁君編輯

# 男女自宅職業獨案內

## 實地應用美術的職業類案

近來世間に自宅職業生募集と稱し繪畫彩色の法を傳授する者續々たり繪畫彩色素より不可ならん然れども自宅職業必しも繪畫彩色に限らざる他之に優るの良法數々あり本書は即ち彼の繪畫彩色を得て而も相當の賃金を得る美術的職業中本所に於て多年實地に應用して尤確實と認めたる者數十種を撰擇し孰れも懇説詳解宛ら左記目録の物品は何れも海外貿易品又は内地の流行品に付製品の手を以て教ふるが如く記述せり尚利益は通常平均一人一日金十四五錢より上達して七八十錢のもの概目 第一章緒言(内職のすゝめ) 第二章繻物の手藝(繻箱、ハンカチ) 第三章繻物の手藝(編形、裁帛法、綿詰め法、繪畫彩色法、美術的諸畫彩色法、繪畫彩色用水膠製法、繻工用ワニス製其他種々) 第四章各種繻物細工法(紙硝子製法、硝子鏡製法、硝子彫刻法、硝子書畫法、拾壹章造化術(花の造り方、葉の造り方、軸の造り方、造花の順序) 第十二章各種牙骨及角類細工法拾壹章各種着色法 第十四章粘土細工法 第十五章各種雜手藝(晴雨變映花かんざし製法、自宅西洋洗濯法、夏冬帽子洗濯法、襪襪より藍を抜く法、鍍銀剝離法、ゴム引雨衣製法、カバン塗る簡法、破れ靴皮利用法、西洋蠟燭製法、簡便 附錄 人造磨石水製法、滋養強壯ヘルメス製造摺附木製法、半切早糴法、其他種々) ●附錄 法 化粧水製法 其外新發明有益法數件

# 金儲れ知らず

本書の初めて世に出るや斬新の奇書鴻益の珍冊なりと大阪朝日大阪毎日大坂商業會議所員、商工會員、勸業課員及び各地有力の實業家諸君より陸續褒譽の辭を辱ふせり殊にを以て遠近傳聞發賣非常に嵩み初版再版何れも數千部宛賣り盡くし今回三版を發行するの盛運に達したり依て弊舖も一層奮發し印刷を鮮明にし 低廉 便利に供せんとす諸君機を失せせ急御注文の製本を真美にし而して代價は前日より却て 帝國商工會主催者西村東行君編纂

# 實地商略 起業致富の秘訣

諸君の立身出世の捷徑 事業成功の秘訣 蓄財の初 農林場より大身代 手取の品物賣りの奇策 他人の力で我品を賣る妙計 商業的權謀 商業的順智 僅々數圓の資金 金法の一信百萬圓を得たる人 尋ばせて大利を得る法 慧眼百萬を聚ねし法 上品の職業と下品の職業 利益の永續の業と利益不續の業 無資立身の法 薄資大利を得る實談 十錢の元金にて一商店を開く事 〇五〇錢の元で一月平均十七八圓宛儲る事 〇一圓までの元で夫婦安樂に暮せる事 〇今日直に取付る商法 〇照ふりなしの營業 〇必せ賣れる商法 〇面白奇利ある商法 〇時々の商法 〇旅費不用全行商法 〇二圓の元金で一月三拾圓宛儲けし實談 〇面白奇利ある商法 〇時々の商法 〇旅費不用全行商法 〇二百圓儲けし實例 〇一ヶ月三拾圓宛儲けし實談 〇面白奇利ある商法 〇時々の商法 〇旅費不用全行商法 〇元で廿日間五拾圓あげし實談 〇紙屑買より巨商となりし實談 〇商業の心得 〇資本運轉の巧拙 〇商略必中必勝の術 〇米相場場の秘訣 〇信用を得る談 〇正確なる金儲けの秘訣 〇容易に金を儲る秘訣

内務省 版權登錄 增補訂正 第三版

卷頭には大阪朝日大阪毎日 丹君の題辭あり 全一冊紙數二百ページ 拾七錢 郵便特別減價 郵券代用一割増



招く法●立身出世の最上策●一生困難せぬ法●人間の最大難事●貯金の秘訣●無一文より巨万の富を得し實談●細謹大功を成せし實談●一針大銀行を起せし實談●世帯の取締法●節儉の最良法●時  
 間利用法●借財せざる法●商業を永久隆盛ならしむる法●附録●處世立志の金言十數章  
 増補の目録●金法●一代之二千萬圓の財産を作れる要訣●巨利増殖法●樂裡生利策●四樂盛壓策●  
 を得るの極秘●商賈の皮肉●事業家の禁物●間を潰さぬ要心●巨資を作るの秘訣の順序的不順序的  
 の利弊●實利的要訣●一寒貧生立身考●一志貫徹策●三巨利増殖法●樂裡生利策●四樂盛壓策●  
 餞を以て鯛を釣るの商略●超然主義を以て大利を獲取する商略●養生蓄資の秘訣●富を生むる根元  
 の指定●貧困に陥らざる秘傳●安心法●奇利を得る手段●何事も成就せしむるものあり●投機を  
 爲すの捷徑●高下を見るの秘傳●賊勇獲金法●一無一物を以て大富となるの要訣●二斷然的頭角策

阿村與一郎編輯

# 慷慨家詩集

西洋假綴願ル美本全一冊  
 正價金貳拾五錢  
 郵 稅 四 錢

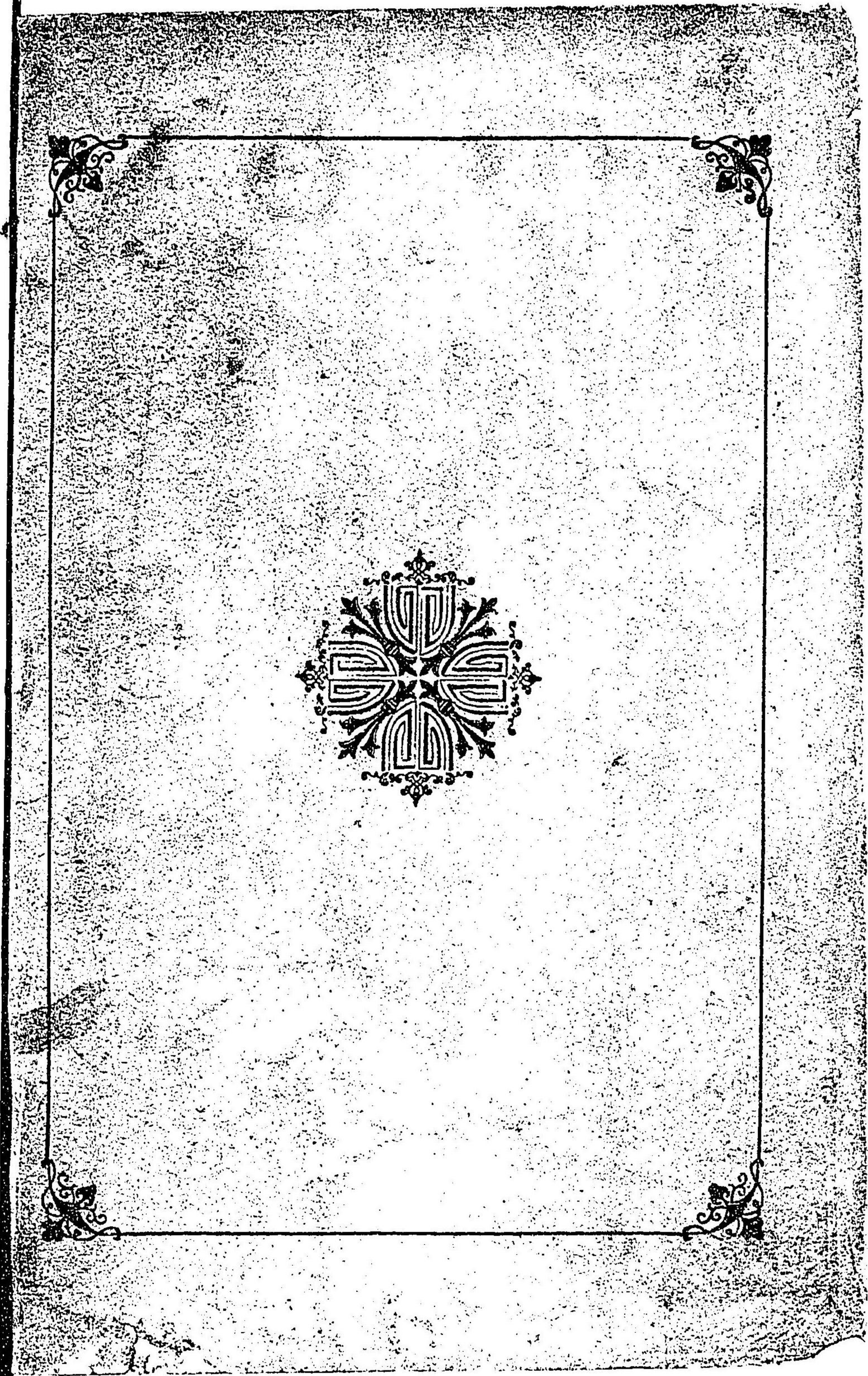
此書は維新前後國事に奔走し王家に勤勞せし雄君英士志人の時に觸れ物に感し平生胸間に包蓄せる  
 慷慨悲憤の至情より出で、詞藻となりしもの數十章を採集すれば一讀其人の風采を追想せしむる  
 耳ならせ看て以て慨く可し怒る可く切齒扼腕坐に我國固有の元氣を勃興せしむ乞ふ青年諸士一部を  
 座右に置き日本男子たるの名に背かざらんことを

出版發賣所

大阪東區堺筋備後町角

盛業館







特 8

783

091306-000-0

特8-783

秘蔵文庫

楠蔭散史/編

M26

DBN-2184





5590

特 8

783

